
CHAT

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

CHAT

【コード】

N4871C

【作者名】

【あらすじ】

今日もネットの片隅では、チャットで会話の花が咲いている。あとこれはホラーです。

CHAT

(前書き)

おとなの夏ホラー2007の末席を汚す事になりました
若輩者ですがよろしくお願いします

CHAT

CHAT

午後十時。佐藤由香里は愛用のノートパソコンをテーブルの上に持ってきた。

電源を入れ、ブラウザを起動させて、いつものサイトを表示させる。

先日、高校の同窓会に出席した時に、教えてもらったサイト。同じクラスだった人達が数人あつまってチャットを楽しんでいるという。

懐かしさからチャットを覗いた由香里は、たちまち夢中になって夜になるとパソコンの電源を入れるようになった。

そして今日も由香里はキーボードを叩く。

佐藤：こんばんは

工藤：佐藤さんこんばんわー

由香里がチャットに入ると、工藤がいつものように挨拶をしてきた。

クラスの中では明るい人気者だった工藤。由香里はいつも人の輪の中にいた姿を思い出していた。

佐藤：工藤君だけ？

工藤：今日は桜井と遠野が来るらしいよ

由香里は、桜井の長い髪といつもうつむき気味だった顔を頭の中で思い描いた。高校三年間同じクラスで、一番の親友だった桜井。引っ込み思案で、いつも由香里の後ろにいた桜井。真っ赤な顔をして遠野の事が好きだといった桜井。そんな桜井を見て私に任せてといった由香里。

CHAT

工藤：そういえば、桜井と遠野って結婚するんだって？
佐藤：そうそう。この間の同窓会の時に言ってた

久しぶりに会った二人は、高校の時と雰囲気あまり変わって
なかった。物静かで落ち着いた遠野と、その少し後ろに佇む桜井。

二人がはにかみながら言った台詞。

「今度結婚するんだ」

「そうなんだ、おめでとう」

よどみなく言えた自分に由香里は驚いていた。もつと言いよどん
だり、絶句するような気がしたのに。

工藤：びっくりだよな！。もう結婚する奴が出てくるんだ

佐藤：もう卒業して大分経つからね

時間が解決してくれたのか、それとも年をとってそういうものが
鈍ったのか。由香里がぼんやりと考えていると、チャットルームの
入室者数が四人になった。

遠野：こんばんは

工藤：おー、こんばんは。結婚おめでとう！

桜井：皆さんこんばんは

佐藤：こんばんは

遠野：ありがとう

チャットが一気ににぎやかになった。取り留めの無い会話が心地
いい。

工藤：遠野、たまには帰ってこいよ

遠野：こんどの盆にでも帰るよ

CHAT

そういえばこの二人は親友だったんだっけ。由香里は高校生だった時の事を思い出していた。いつも見ている視線の先にいた二人。

工藤：そっぴやそろそろ盆だよな

佐藤：そっぴだねえ

工藤：という事で怖い話コーナー

遠野：怖い話？

桜井：えー

工藤の思いつきでチャットがおかしな方向へ向かいだした。

工藤：それじゃまず……遠野なんかない？

遠野：そっぴだねー、くねくねとかは？

桜井：なにそれ？

それぞれが適当に怖い話をしていく。チャットではやり辛いはずなのだが、皆気にしていないようだ。由香里も小耳にはさんだ怖い話を披露する。

佐藤：で、浴槽のへりと手の間で一気に

工藤：かかか勘弁してくれー！！

遠野：ちよつと……それは

桜井：ふーん

少し男性陣にはきつかったようだ。ふふん、と由香里はよく分からないが何かを仕返した気分になった。

佐藤：最後は工藤君ね

CHAT

工藤：まかしとけ！

遠野：自信ありそうだな

工藤：おうよ！ こないだ見つけたサイトなんだけど、こいつは怖いぜー

高校時代そのままの工藤を見て、由香里はキーボードから指を離してふっと笑った。調子に乗りやすいあの頃のまま。自分はどうかろう、変わったのか、変わってないのか。

工藤：http://milky.geocities.jp/
kakakomikasihemiri/

ふと画面を見ると、工藤が書き込んだURLが見えた。一体どんなサイトだろうか。由香里はもう一つブラウザを開き、URLをブラウザのアドレス欄にコピーアンドペーストして移動のボタンを押してみた。

「……何これ？」

思わず呟いた由香里の視線の先には、意味不明の言葉の羅列が表示されていた。

「かかこ……みしみ？」

よく見ると、所々単語になっている部分もあるが、文として意味が通っていない。

薄気味悪い何かを感じた由香里は、そのサイトが表示されているブラウザを閉じた。

遠野：何だよこれ

桜井：気分悪い……

チャットの雰囲気が一気にどんよりとした物になった。由香里も何か表現しづらい重い物を感じて、側に置いておいたお茶を一口飲

む。いつもより苦い気がする。

工藤：どう？ なかなか怖いつしょ

遠野：怖いというか不気味というか

桜井：ごめん、なんか気分悪くなったから寝るね

佐藤：大丈夫？

この日は結局、桜井が不調を訴えて落ちた後、遠野もいなくなり、残された二人もなんとなく会話が続かずにお開きになった。

あれから三日が過ぎ、また夜がきた。

由香里はノートパソコンに電源を入れる。心なしかパソコンが重くなったような気がする。

チャットにはすでに二人の先客がいた。

工藤：心当たりは探したのか？

遠野：行きそうな所は全部

佐藤：どうしたの？

いつもとは違う雰囲気、由香里が尋ねてみると、桜井と連絡が取れなくなったという。

一昨日の夜、電話しても一向に出ない。そこで桜井の家に電話してみると、三日前の朝出て行ったきり、職場にも現れずどこかに消えてしまったという。

工藤：何か変わった様子はなかったのか？

遠野：三日前の朝電話したら、気分悪いつて言ってたけど

佐藤：警察に連絡した方がいいんじゃない

遠野：桜井の両親が警察行っただけ

ただならぬ雰囲気にチャットで会話を楽しむどころではなくなつてしまった。由香里は二人と、何かわかったら知らせるといふ約束で携帯の番号を交換した。

パソコンの電源を切ると、由香里は桜井の家に電話してみた。久しぶりに聞く桜井の母親の声は少し疲れているように聞こえた。

「久しぶりね由香里ちゃん、元気だった？」

「はい、それで祐子の事なんですが……」

「……うん、まだ、帰ってこないの。でも由香里ちゃんは心配しないで、きつと、帰ってくるから……」

桜井の母親の声を聞きながら、由香里は得体の知れない悪寒を感じていた。何か、嫌な感覚。

電話を終えた時にはすっかり疲労していた。ただ電話をしたただけなのに、体がだるくて気を抜くとしゃがみこみそうになる。いろいろと考えたい事があつたが、由香里は早く寝る事にした。

朝起きると由香里は風邪を引いていた。引出しの奥から体温計を引っ張り出す。37.8度、道理で体がだるいはずだ。

由香里は会社に休むと連絡した後、ただひたすら眠つた。夢の中で由香里は遠野の背中を追っている。工藤と二人でいる遠野を追いかけた。桜井と二人でいる遠野を追いかけた。そしていつの間にか遠野はいなくなっていた。

耳障りな音が由香里を夢から現実に引き戻す。もそもそと手を伸ばして鳴り続ける携帯を掴む。

「……もしもし」

「あ、佐藤？ 遠野だけど」

由香里は跳ね起きた。

「え？ あれ？ ここは？」

「あれ？ 佐藤、だよな」

「あ、そうそう！ えーと、どうしたの？」

由香里は枕もとに置いてあつた水を飲んで落ち着くと、携帯をし

っかりと手に持った。

「工藤から電話なかった？」

「いや、なかったけど」

由香里の言葉に、遠野はしばらく黙った後口を開いた。

「工藤の携帯がつかなくなかった」

「え？」

「昼前に電話した時はちゃんとつながったんだけど……」

由香里は時計を確認した。すでに午後三時を過ぎている。

「どういうこと？」

「いや、俺にもわからない。ちょうど今日から盆休みでそっちに帰るから、工藤の家に行ってみる」

「あ、うん」

「ついたらまた電話するから」

「わかった」

由香里は携帯を切った後、時計をじっと見つめた。桜井と工藤、立て続けに連絡が取れなくなるなんて何かあったのだろうか。ぼんやりした頭で考えていると、また睡魔が襲ってきて由香里は眠りに落ちていった。

由香里が目を覚ますと夜の十時になっていた。とりあえずテレビをつけてニュースを眺める。

しばらくすると、携帯の着信音が鳴り出した。すぐさま由香里は携帯を掴んだ。

「もしもし」

「……佐藤か？」

やはり遠野だった。由香里はとりあえずどうなったか聞いてみる事にした。

「工藤君は？」

「佐藤、落ち着いて聞いてくれ」

遠野の声が少し震えている。由香里は何も言う事ができずに黙っ

てしまった。

「工藤……死んでた」

「えっ」

「今、工藤の家に警察が入ってる」

由香里は寝起きの頭をフル回転させて状況を掴もうとした。

「じゃ、じゃあ、工藤君は電話した後死んだの？」

由香里の言葉に、遠野はしばらく黙った後、一言一言噛みしめるように言った。

「工藤は……骨になってた」

「骨……？」

由香里は思考を進めようとするが、どこにも引つかかる事無く空回りするだけだった。

「まだ、ちゃんと検死をしないとほつきりした事はいえないけど、死後半年は経ってるんじゃないかって……」

「半……年？」

ますます由香里の思考は空回りした。一体何がどうなっているのか。

「え？ じゃあ、チャットの」

「わからない。偽物なのかも。でも昼に電話した時の声は確かに……」

遠野と話しながら、由香里はテレビから聞き覚えのある単語が聞こえてきた。

由香里がテレビを見ると、四角い画面に懐かしいあの場所が写っている。

「……こちら現場です。今日夕方頃、県立御岳高校の体育倉庫で、若い女性が首を吊っているのが発見されました。女性は桜井祐子さん(24)で家族から捜索願が……」

由香里はニュースを見ながら足の力が抜けていくのを感じた。

「遠野君、ニュースで、祐子が……」

「えっ？」

CHAT

喉の奥で何かが邪魔をしているようで、声がうまく出せない。

「祐子が、高校で、首……吊ったって」

「え？ どういう事？ 祐子が」

「祐子が高校で首を吊っているの！」

引つかかっていた何かが取れたような大声が出てしまった。

「……今から学校行って来る！」

遠野は乱暴に携帯を切った。由香里は返事する事もできず、通話が切れた携帯を握り締めたままぼんやりと前方を見る事しかできなかった。

由香里が我に返ると、時計の針は午前一時をさしていた。部屋を見回すと、パソコンが見える。

いつの間にか電源が入っていて、いつの間にかいつものチャットが画面に表示されている。

工藤：ごめんね

入室者は、一人。

工藤：寂しかったんだ。ごめん。

何もしないのにメッセージが映し出される。

工藤：一人はもう嫌なんだ

桜井：いや……帰して……いやあ

入室者は、二人。

工藤：あのサイト、皆と一緒になるために俺が作ったんだ

桜井：助けて……お願い

遠野：佐藤！ 逃げろ！ 早く！

CHAT

今日もネットの片隅では、チャットで会話の花が咲いている。

風祭：こんばんは

宮迫：こんばんは

桜井：はじめまして

風祭：あら、はじめまして

佐藤：逃げて！

宮迫：え？

佐藤：なんちゃって、皆さんはじめまして。

佐藤：夏にぴったりの納涼サイトがあるんですよ

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4871c/>

CHAT

2009年3月24日10時32分発行